

角川文庫

—2710—

愛情の悲しみ

源氏鶏太



角川書店



角川文庫

あいじょう かな
愛情の悲しみ



昭和四十五年十二月二十日 初版発行
昭和五十年十一月三十日 十二版発行

定価は、カバーに
明記してあります

著作者 源 氏 鶏 太

発行者 角 川 源 義

印刷者 中 内 佐 光

東京都文京区関口一ノ二四ノ八

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
郵便一〇二二 電話東京一九五二〇八

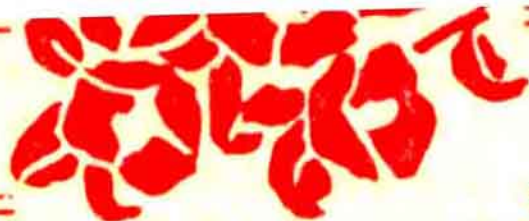
株式会社 角 川 書 店
電話東京(265)三二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

暁印刷・大谷製本

0193-122422-0946(1)



角川文庫

—2710—

愛情の悲しみ

源氏鶏太



角川書店





角川文庫

あいじよう かな
愛情の悲しみ



昭和四十五年十二月二十日
昭和五十年十一月三十日
初版発行
十二版発行

定価は、カバーに
明記してあります

著作者
源^{けん}氏^じ鶏^{けい}太^た

発行者
角川源義

印刷者
中内佐光

東京都文京区関口一ノ二四ノ八

発行所

東京都千代田区富士見二ノ十三
郵便一〇二
編集東京一九五二〇八

株式会社
角^{かど}川^{かわ}書店^{しょてん}
電話東京(265)三二二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

暁印刷・大谷製本

0193-122422-0946(1)

脆い女

春の雨がアパートに近くなって、落ちて来た。ああ、たいへんだ、洋服が濡れる。はじめは小走りに、やがて章子は激しい勢いで走りだした。

「やあ、一帳羅が濡れましたやろな」

薄暗い玄関で、苦しい呼吸に喘いでいると、若い管理人が受付の小窓から声をかけた。章子は鉄縁の眼鏡ごしに、ちらッと見返したが、無言だった。まだらに濡れている小さい顔を、水色のハンケチで叩くように拭うと、瘦せた胸を張って、管理人の苦笑を尻目に、堂々と奥へ入っていった。

章子は二階の一番奥、押入の無い、三畳の部屋に住んでいる。蒲団を敷くと、もういっぱいである場所も無い。しかし、百貨店につとめている章子に、この時節、特別な調度品がある訳はなかった。わずかばかりの自炊道具、古びた柳行李、姫鏡台、月遅れの文芸雑誌、それに誰の眼に

もこの部屋に不似合な、これだけとは岡山から持ってきた琴、そんなものであった。三畳で、畳が破れ、壁に雨漏りの地図が薄汚く描かれてあったとしても、二十七歳の女ひとりが生きてゆくに我慢できぬことはない。

その夜、春の雨がしとしと、女の心を濡らすように降っていた。貧しい夕食をすまし、横光利一の小説を読み終ると、章子は何もすることは無かった。お昼、若くてピチピチした同僚と、つまらんことから口論した。章子は年長らしい落ちつきを崩さないで、ねちねち理詰めで向った。やりこめられて、相手は泣き出した。章子は勝ったのだ。亢奮に逆上した相手は、出戻りの意地悪根性！とやぶれかぶれに叫んだ。章子は顔色を変えた。その失礼なひと言で、章子の勝利感の位置が、揺れてしまった。たしかに自分の方に理があるのに、周囲の男たちの眼が、若い女に同情を寄せていた。二、三の眼は章子の眼鏡の下の小さい顔に、薄ら笑いを向けていた……。

章子はいったん敷いた蒲団をさも腹立たしげにたたんで、琴を横にした。六段を弾きはじめた。六段のほかのものは、章子はアパートでは弾いたことがない。琴の音は、ころんころんと何となく悲しげだ。春の雨は、やはりしとしとと降っている。

章子は琴の音のなかで、別れた良人^{おとこ}を憶い出している。もう二年も前のことだ。姑^{しやう}のいいなりになって、すこしも章子をかばってくれなかった。章子が家を飛び出す決心をしたときにも、困った困ったというだけで、それでは一緒に俺^{おれ}も、とはいわなかった。優柔不断な性格であった。そのくせ、姑の眼のとどこかぬ夜は、しつこいくらいに可愛がってくれた。その肌の感覚だけは、

今も忘れられない。姑への不満が頂点に達して、章子は岡山の家を飛び出して、東京へ出た。あとから良人が追ってくるに違いない自信があったのに、いまだにやってこない。章子は裏切られたように口惜しい。心はたしかに良人に腹を立て、憎んでいる。ただ、困ったことに、肉体が良人の肌を恋しがってる。二十七歳にもなっているのに、それが自分にもよくわかり、したがって眠られぬ夜もある。そんな夜は、体が獣じみて苦しかった。そのくせ、部屋の外へ一歩出ると、つんと冷たく、澄ました女になる。二年前、このアパートに來た頃は、もっと可愛い女であったが近頃は水気を失って來たようだ。出戻り女の弱さを見られまいとする自尊心のせいか、それとも良人がきつと追ってくると思じて、誰の眼にも、貞操の固い女になっていたのか。

六段の中に、章子の過去への郷愁がある。淋しいとき、やるせないとき、六段に魂を打ち込むと、なまなましい思いが、身うちに甦よみがえってくる。しかし、きょうは隣室の聲が、さきほどから邪魔になって、心が乱されてならぬ。普通の声ではないのだ。隣室の闇屋やまやめが、また女をひきいている。廊下で見たことのある、バカみたいに肥った猫顔のあの女に違いない。ふざけている。ひそひそと急に声をひくめたり、含み笑いを洩らしたり、何をしているのか、章子にはわかった。そんな情景が、頭腦のなかにちらつき出しては、もう琴は弾けなかった。章子は琴を押しやり畳の上に引っくり返った。やはり雨が降っていたが、もうその音も耳にはいらなかった。頭に血が上って、胸が騒いだ。眼のなかに光がみなぎってくる。隣室のふたりのやっっている痴態が見えてくる。それが想像で誇張されているので、章子は息がつまりそうであった。

花曇り、とてもいう日なのであろう。何んもなく頭痛がし、気持が冴えなかった。章子はそれでも胸だけは張つての百貨店からの帰り、電車を降りたところで、やアと声をかけられた。隣室の今泉である。章子は数日前の夜の、自分の異常な亢奮ぶりが思い出されて、ちょっと胸を熱くした。にやにや笑っている今泉は三十歳前後であらう。素晴らしい赤皮の手提鞆てさげかばんをぶら下げてゐる。靴も洋服も、たいしたものだ。顔は靴や鞆たもとみたいに立派だという訳にはいかぬが、赫味あかみを帯びていかにも精力的である。まともに近々と見上げて、はじめて気がついたが、鼻のあたりが、どこか別れた良人の舟橋に似ている。

今泉は章子を喫茶店に誘った。花やかな雰囲気のなかにつとめているが、この一年間ほどに、章子をそんな場所に誘ってくれたのは、今泉だけだ。章子は今泉の生活態度に腹を立て、軽蔑けいべつしているが、そのときは悪い気がしなかった。

つつましく作法の時間みたいな恰好かつこうでコーヒーを飲んでいる章子を、今泉は深々と椅子いすにかけながら、無遠慮な眼で眺めている。

「田山さんは、どうして御主人と別れたんです？」

「さア……」

章子は眼鏡ごしに、ちらッと今泉を見たがあとは唇許くちもとに謎めいた微笑をうかべただけであった。

説明してやるほどの男とは思っていない。今泉は高級煙草にライターでぱちんと火を点けた。一服すっていった。

「僕でしたら別れませんね。僕はね、そのあなたのような、何んとも冷たい感じの女が好きだ」

自分が冷たい感じの女であろうか。ふんと章子は肩を上げる。いってやった。

「今泉さんのお部屋へ来なさるひとは、どうですか？」
いってから、章子の顔があからんだ。

「いやア、あれは柳みたいないな女でね。すくなくとも抵抗を征服して、最後に音をあげさせる、という興味ある女ではないね。堅い樹は抵抗が強くて、力つきたところで、ポキンと折れる。男の情感をそそる女は、どうしてもつんと澄ました……」

「まア」

章子はきつい眼で、今泉をにらんだ。自分をそんな意味で見ていたのか。ああ、穢^{けだ}らしい。しかし、気がつくと、肉体の眼が、今泉をまぶしがっている。

「おや、憤ったんですか？」

「失礼ですわ」

章子は起ち上った。今泉は立たぬ。にやりと笑う。ひとつの抵抗だとたのしんでいるのか。章子は出口の方へ、蹴るように足をはやめながら、今泉ともっと話していたい、後髪をひかれる思

いもあつた。

三

「あッ」

章子は部屋の入口で立ちすくんだ。全身の血が、スッとひいていった。それが、すぐ、カッと逆流してきた。

「やア」

舟橋は仰向けになっていたが、てれたように笑った。半身を起こして、

「やっと、来れたよ」

と、力の無い声でいった。

無精髭ぶしやうひげのまばらに生えた舟橋の顔は、薄汚かった。まだ、三十四歳のはずなのに、爺じいむさくて、二年間も思い続けて来た男にしては、ちょっと期待はずれであった。もっと立派な男であったはずだ。しかし、鼻だけは、やっばり、今泉に似ている。

「どうしておいでになりましたの？」

いつもの章子らしい冷たい調子が出る。もう良人ではない男だ。なるべく離れて、きちんと坐り、洋服の膝を気にしている。

「殺生なことをいうなよ。せっかく、もういちどお前と一緒になろうと思って来たんだ」

「あたし、もう、岡山へなんか、帰りませんわ」

「無論さ。俺も東京で就職して、お前とふたり大いに我ン張る決心でいる」

「ダメよ。あなたはいつも口だけで、気が弱いんだから、あたし、信用しませんわ」

「こんどは大丈夫だ。岡山からはるばるお前を慕って来た心も汲んでくれよ。おい、そんなに離れていないで、もっとこっちへおいでよ。他人みたいで、気分が出ない」

「他人ですわ」

「何をいってゐるんだ。それとも、お前には、もういい男でもあるのかい？」

「まア、失礼な。あたしはそんなふしだらな女ではありません」

「それなら、いいじゃあないの。何も、お前今さら——」

良人は眼をひからせてすり寄って来た。章子は身を引いた。しかし、三疊の間では、壁にすぐ背があたった。舟橋に手首を握られた。別の手が肩にかかり、ぐっと引寄せられた。章子は男の胸の中でもがいた。

章子は、そんなに簡単に妥協するものか、妥協するにしても、はっきり男の心底をたしかめてからでないと、二年間の自分の悲しみや憤りが水の泡同然になる、とくらくらする頭脳の中で思っていた。いつか、章子の眼鏡はそこらに飛んでいた。汗くさい男の体臭が章子の嗅覚を衝いた。章子は身ぶるいをした。早い男の呼吸が耳許できこえる。男の腕に、ますます力が加わり、章子の体はしびれるような感覚に酔っていた。むかしの良人そのままだ。この良人に対する憤りが、

章子の頭脳の中で、しきりに明滅していたけれども、章子はいつか感傷的になっていた。泣きながら、良人にしがみついてゆく自分の体を、今はどうにもできなかった。

朝、眼がさめると、すぐ横で、良人は章子の胸に腕をのせて、寝息をたてている。章子はしばらくそのままの姿勢で、天井の節穴を見つめていた。この三畳の部屋が、今日は光に満ちた天国のように思える。夢のようだ。

そっと、起きあがった。体の力がぬけて、すこしよろめいた。しかし、身うちに溜っていた重い滓^{かみ}みたいなのを、吐き尽したようで、心は幸福感に満ちている。

共同炊事場には、誰もいなかった。良人のためにとときの白米を炊いてやろうと思った。指先にしっとり米がまつわりついてくる。とぎながら、窓の外を眺める。晴れている爽^{さわ}やかな朝の空気が、眼に沁みこんでくる。何んとなく、鼻歌が出た。

「やあ、嬉しそうですなア」

管理人がにやにやしながら、うしろで立っていた。章子はすこしあかくなった。もう、つんとはしない。

「あッ、そうそう。石原さんをお願いしますの。こんどあたしの良人が来ましたの。ねえ、もっと広いお部屋、ございません？」

「さア、今すぐには」

「お願いしときますわ」

部屋へ帰ると、良人はまだねむっていた。章子はしばらく良人の寝顔を見てから、姫鏡台の前に坐った。鏡に顔を見られるのが、すこし恥ずかしい。鏡の中で、章子の眼鏡ごしの眼は、いきいきしている。血色もいい。皮膚に艶つやができた。一夜で、生れ変わったようだ。白粉おしろいも気持よくのびた。可愛い女が出来上ってゆく。

「もう、何時だい？」

うしろで、良人の声がした。

「あら、まだ、早いわ」

振返ると、良人と眼があつた。章子はまぶしげに笑ってみせた。良人はすっかり満ち足りた顔をしている。

「はい。煙草」

まだ売らないでいた配給のきんしを出してやった。良人は相好そうこうを崩した。

「ほう、ありがたい」

いかにもうまそうに喫すいはじめた。ゆっくり煙の輪を吐いている。

「何んだか、部屋の外へ出るのが、気がひけるなア」

良人は気の弱い、臆病な顔をした。

「何をおっしゃるの。大威張で歩いて頂戴。あたしはあなたの顔をつぶすようなこと、この二年間、何ひとつしてないんですからね」

章子は今泉のことを思い出した。しかし、今は何んの苦もなく、彼を黙殺できた。

「うん、それは信用するよ。お前はすこしも変っていない。昔のままだ。安心した」

「まア、何んのこと？」

「すぐ、思いあたって、」

「まあ、嫌な人」

四

章子はその日、店を休んで、良人と銀座へ出た。よれよれの洋服を着た良人に寄り添うように歩いて、章子はうきうきしている。田舎者らしく、あたりをきょろきょろ見廻している良人が好ましい。ときどき肩が擦れ合う。からだのどこかが熱くなってくる。章子が金を払って、映画を見、コーヒーをのんでアパートへ戻った。

「ああ、疲れた。やっぱり、お前とここにるのが一番うれしい」

良人はすぐ畳の上に、ぐったり仰向けになった。外を歩いているときは律義者らしく振舞っているが、部屋のなかでは、亭主らしく章子の膝の上に頭をのせてくる。うっとり眼を閉じて、章子の指を、胸の上で弄もてあそんでいる。章子は何んともやさしい顔になっていた。

「ねえ、どんなお仕事になさるおつもり？」

「そらだなア」

良人は気の無い返辞をして、眼を開かぬ。

「当分はあたしも働くわ。共稼ぎだって、たのしいわ」

「うん」

「転入するためには、進駐軍関係の仕事をするといいのよ」

「労務者かい？ 俺はやっぱり岡山でみたいに、役場とか、銀行とか、洋服を着てつとめられるところがいいんだ」

「でも、今頃、そんなこと、なかなか無理よ。商業学校三年中退では、むづかしいわ」

「そうかなア」

「ねえ、はっきり、決心して頂戴」

それでも良人は眼を開かぬ。むかしながら煮え切らぬ良人だ。ちっともはっきりしない。章子ははがゆくなった。きつと、眉を寄せた。強い力で、自分の指を良人の胸から引いた。しかし、良人は放さなかった。眼を開きちらッと章子を見たが、すぐさま眼を閉じた。ひくい声で何かいった。

「何よ」

章子は不機嫌になっていた。

「ちよっと何なのよ」

章子は良人の顔に耳を寄せていった。待っていたように両腕がのびて、章子の頬をはさんだ。